

*** 水の循環を守った文明

民族の世紀ともいわれる21世紀は、同時多発テロで幕を開け、いよいよアラブの盟主、エジプトにも民主化の波が押し寄せている。この波動はインターネットによる情報共有の深化がもたらしたものとされており、隣国中国にも波及する勢いである。

文明の利器が文明そのものにどう作用することとなるか、その行き着くところは現代の合理主義、個人主義が一方的にはびこる世界とならないことを祈るばかりである。

なぜなら、今世紀は水の世紀でもあり、食料、エネルギーなどとともに地球上の限られた資源のなかで、すべての生き物の共存が求められることになるからである。

昨秋、「環太平洋の生命文明、水の循環を守った文明」と題する講演を拝聴する機会を得た。講師は安田喜憲・国際日本文化研究センター教授。梅原猛氏らに連なり、文明や歴史を自然環境との関係で研究する環境考古学を提唱した地理学、考古学の泰斗である。

講演のなかからツマミ食いすると・・・

「文明」civilization という言葉は、物理的・精神的豊かさを指すもので、福沢諭吉が我が国で最初に用いたらしい。参考までに、この文明の定義は、「文化」は文字などのソフトを指し、移転・移動できないもの、「文明」はそれらをも包含する物質的豊かさなどハードを指し、移動できるもの、と文明と文化を区別する梅棹忠夫氏らによる従来解釈とは立場を異にしている。

そして、両者を一体とする「文明」は公知(智)・公德にかなう概念であり、利他の心・慈悲の心あるいは生命・生きとし生けるものなどがその原理に存在している。従って、崇拝の対象物はその文明の根源を示すものと考えられる。

世界の四大文明はパン・ミルク・肉に象徴される「畑作牧畜文明」であった。これに対して、中国・長江沿川には米と魚を食べる文明すなわち「稲作漁撈文明」が存在した。

この長江文明の遺跡に残る丸と四角の積み石は天と地の結合、つまり森・里・海の水の循環系を意味しており、この至宝の玉(ぎょく)は山をシンボルとして示すものであった。山は水が流れてくるところであるから、山を崇拝する文明は「水の文明」だったのである。

この「水の文明」は稲作の水利用から生み出された高い精神性を有する。稲作はきれいな水の利用を必要とすることから、人を信じる心、公共心をもたらすからである。つまり、水を利用する際には、上流で毒や汚いものを流したりしていないと信じて使い、下流での利用を考えて必要最小限の水を汚さないように使うことが行われてきたのであり、それは上下流の人を信じ、取り巻く自然を信じ、さらには未来を信じる精神を育ててきた。

こうした稲作は1万4千年前から行われてきた。ちなみに、麦作は1万2千年前からとされる。

ところが、4,200年前に畑作牧畜文明の漢民族が進入し、今では長江文明はわずか

に雲南省に少数が残るのみとなっているが、一方で、水の文明は朝鮮半島へ渡って呉越となり、さらに、越の国すなわち日本に伝わった。もう一方は、台湾を通して太平洋を横断し、モヤイ像のイースター島へ、さらには南アメリカまで伝わったとされる。

その痕跡は各地に石像などとして残されており、そこに表現されている太陽は命を育む女性、山は天と地の架け橋であり、柱は天と地を結合するもの、そして、その上には太陽を運ぶものとして鳥がとまっている。そのどれもが崇拝の対象であり、こうした崇拝の対象を追っていくと、カンボジアのクメール文明も水の文明、世界遺産マチュピチュの棚島を見るとマヤ文明もアンデス文明も水の文明である。

水は太陽により蒸発し、そのエネルギーを運んできて雨となり、大地を潤して海へ戻る。「水の文明」は、太陽のエネルギーを大地に投入して、不毛の大地を豊かな大地に変える「生命文明」でもある。

環太平洋に今も生きる、高い精神性に支えられた「生命文明」が、「物質エネルギー文明」から 21 世紀型文明への転換に果たすべき役割は、決して小さくはない。瑞穂の国、水の文明国としての日本の貢献、リーダーシップとりわけ日本人の心のありようが国際的にも問われている・・・と感銘を受けて会場をあとにしたが、さて、自分には何ができるのか、未だ問答中である。

20110227 MS生

奇しくもこの2週間後、突如として襲った東日本大震災は、広範な地域に未曾有の被害をもたらすこととなった。非常事態が、悲しみが続くなかにあっても、日本人の行動は「水の文明」に通じるものであった。世界が注目するなか、賢明な日本人は、今この試練に立ち向かい、自分がなすべきことを考え、その具体化に努めており、期せずして全世界に日本人の高い精神性を示すことになったのである。

以下、「高い精神性に支えられた文明の証明」に続く。



未来を拓くのは笑顔の対話